九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[046] 史淵表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2338992

出版情報：史淵. 46, 1951-02-15. Faculty of Literature, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

＝彙　報＝

史學懇話會

○第二十八回　十一月二十九日（水）

（題　目）　チャーティスト運動の研究

（発表者）　堤　市三氏

先づ、チャーティスト運動の性格規定を、学説史的に展開し、その三つの対立する見解、即ち㈠政治的運動、㈡経済的・社会革命的運動、㈢農民的復古運動、について、更に、運動の主体となれる政治諸団体の性格を具体的に分析することにより、該運動の全性格を把握できることを論じた。発表後、質問、討議を行ふ。出席者十八名。

○第二十九回　十二月九日（土）

十二月四日より西洋史臨時講義を担当された一橋大学教授増田四郎氏の歓迎会を兼ねて四階会議室で開催。先生の御豊富な研究体験から、多くの有益な御意見を聴くことができたのは大きな悦びであつた。この会は参会者四十名に達し、座談活潑、極めて盛会であつた。

○第三十回　十二月二十一日（木）

前回と同じく、考古学臨時講義のため御来学中の東京大学助教授駒井和愛氏を囲み、歓迎を兼ねて座談会を開いたが、対島調査を中心として最近の考古学研究の新しい領域についての興味ある話題に接することができたのは大きな収獲であつた。出席者は十八名。

國史科動向

○寧樂遺文研究會

毎週一回竹内教授の御指導の下に有志の者が集まつて寧樂遺文の講読を行つているが、目下「寺院縁起并流記資財帳」の項まで進んでいる。

西洋史學科の動向

○西洋史研究會　（第十二回）十一月十八日

"The Homestead Act and the Labor Surplus,"
By Fred A. Shannon 紹介

高橋　昇

この論文に於いてシャノン（一八九三―）は、合衆国第十一回国勢調査の発表を後の学者が曲解して「一八九〇年迄にフロンティアは無くなり、西部は移住民によつて充たされた」と言つているのは誤りであると指摘し、それを論証せんとしている。即ち東部の工業発達と共に相対的過剰人口を如何にして吸収するかが一八五二年以来問題となり、漸く一八六二年ホームステッド法の成立を見たのであるが、之によつて又その他の立

法〔Pre-emption Law, Timber Culture Act (1873), Desert Land Act (1877), Timber and Stone Act (1878)〕によつて移住は促進されたかというに、実は下層階級のものは貧困の故に移住して自由な土地を得る事が出来ず、実際の移住者は一般に中流階級以上の農民・商人及び投機業者、産業組合、大資産家等であつて、期待された程多数ではなかつた。従つて多くの人々は都市に於ける失業者階級となり、一八六四年以後この過剰労働が絶えず増加して国民生活のある要素となつて来たとし、「失業者が一八六五年からこの世紀の終りまでの十年毎に大きな経済的難問題となり、」「自由地はこの問題を解決出来なかつた。」としている。

この結論は、通常説かれる様に西部の自由地は農民や商人をその没落前に独立の農民として甦生せしめ、従つてその相対的過剰人口への転化が阻止されており、資本主義発展のこの段階では未だ相対的過剰人口は形成されず、そのため労働力の不足は賃銀労働者の賃銀を高い水準に保ち、農業の機械化を促し農業革命を現出するとする所説に鋭い対立をなすものであるが、果してシャノンの説く所が正当なものであるかどうかについては多くの検討の余地が残されている。

○西洋史研究會（第十三回）十二月一日

堀米庸三著　「中世国家の構造」　紹　介　　外村民彦

中世史の研究に著者自身が矛盾を感じ、それにぶつかつて行つてものにされたのが本書である。即ちそこには中世における封建制度の位置づけと、中世国家に対する深い省察がうかがわれる。本書は二章にわけられ第一章は序説として、中世国家論争をのべ、結局中世国家が封建国家につきないことを結論づけて、これを基本的命題として第二章の本論に入る。封建国家の二つの原則たる「国王は何人よりも授受せらるることなし、」「領主なき土地なし、」が必ずしも凡てに云いえられないことを論じて中世における非封建的要素を追求し、それが直轄的行政機構であることを指摘する。この直轄的行政機構をつくらしめたものは、中世封建国家における国王の伝統的権威なのであるが、その権威が、ゲルマン的、キリスト教的、ローマ的の三要素に依つてをり、超封建的性格として国王をあらゆる封建関係からとえさせたのである。

然るに中世国家を構成する人的並びに物的結合団体（「家」組織）は、それ自体において国家権力と共に存しうるのである。しかしかうした構成単位の総和としての全体は決して政治的統一体ではありえない。そこでこの非緊密な組織に可能な限りの緊密性を与へる役割を以てあらわれるのが支配者の直轄的支配組織で、これが権威による統合と封建（知行）制的原理によるその実質化に実効を賦与する役割をもつている。そしてこの直轄的支配組織を広い意味で家産的なものとみて、中世国家とは封建的要素と家産的要素の組合せであることを結論するのである。

十分読みこなしていないし予備知識もないが、いろいろ教へられるところがあつた。たゞ、問題が全く法制史的に取扱われてしまい、また理論を主としてをるために無理なところがあるやうに思ふ。またこの問題が社会経済史的にもほりさげられて行かねばならないであらう。

一つの歴史の見方
——現代生活を解明する鍵としての丘浅次郎の学説——

金生正道

マルクスが人間の社会生活変遷の根源を、経済機構の変遷に求めたことは、確かに歴史的事実の多くを説明するに足る。然し乍ら、それによつては人間の思想独自の発展を十分に説明し尽すことが出来ないと思はれる。例へば、資本家と賃労働者との関係に於ける協力一致の精神の欠如乃至退化は、單に経済関係にのみ起因するのでなく、人間の社会本能によつて必然的に発生するのではないか。この点について、丘浅次郎氏の学説は興味ある解明を与へてくれる。

即ち、同氏によれば、人間の団体生活は、個人が経験を積むに従つて能力を増すため、強者が弱者、愚者を指導する階級型を形成し、社会本能は必然的に階級本能を伴ふ。然るに人間の団体は、道具の発達につれて大きくなり、国家を形成するに至つて、団体間の陶汰は行はれなくなり、社会本能も、階級本能も退化した。退化現象は個人によつて著しく異り、従つて人間生活の矛盾は、この社会本能を多量に、又は少量に（殆ど喪失して）有している人々が、同一社会に共存していることによる、と云はれる。

この学説の反対者としては、既に土田杏村、小野俊一、川村多実二、大杉栄、等の諸氏があるが、筆者は、それらの批判にも拘らず、丘氏の学説には、現代生活の矛盾を解明する一つの重要な鍵があることを認めるものである。なほ、同氏の天才論も注目すべきであらう。

○西洋史學科新卒業生

二十二年四月入学吉野儀次郎氏は、今回二十五年十月三十日を以て卒業された。今後の御研鑽を衷心より切望するものである。

東洋史學科動向

東洋史研究會

第十一回例會（昭和廿五年十月二十八日）

「文化交流史より見たる　満鮮の絹織物に就いて」

日野教授

詳細は後日專攻論文として発表の予定

第十二回例會（昭和廿五年十二月十六日）

「唐代に於ける両税法以前の貲（資）課に就いて」

松永雅生氏

唐代に於ける税制として租・庸・調と並び称せられる賃課は唐代に於るける重大問題であるが、未だに其の実態は究明されて居ない。氏は其研究の一端として、賃課の意義とその推移、特に官吏の收入となるべき賃課について詳細な研究を発表し、賃課に二様（与え賃課・取る賃課）の意義があることを明らかにされた。

○新　刊

九大東洋史研究室の初の試みとして「東洋史学」第一輯を十二月に刊行した。内容は次の如くである。今后続刊の予定であるから御期待を乞う。

北朝隋代濤華交渉史上に於ける朝陽　平島貴義
定安国考（一）　日野開三郎
明初に於ける女直の遼東移住について　江島寿雄
宋史食貨志訳註　研究室員

昭和二十五年四月以降

交換受贈雑誌論文要目

（順序不同）
（歴史関係のみ）

○一橋論叢第十七巻第三・四号
新日本国民の理念と西洋文化（其の一）　三浦新一
奴児哈赤の女眞国とその部族的秩序との交渉　村松祐次

○一橋論叢　第十八巻第二号
行政裁判所の廃止の意義　田上穣治

善の超越性と人間性
—プラトンの「善のイデア」の一解釈—　藤井義夫
ドイツ・インフレーションと工業生産力　泉三義

○一橋論叢　第二十三巻第五号
新中国における貨幣経済の性格　石川滋
中国における伝統と革命の相剋　内田直作
中共土地改革の二つの時期　村松祐次

○一橋論叢　第二十三巻第六号
ホッブスと自然法思想　太田可夫
ロックの自然法の性格　鈴木秀勇
アリストテレスの『プロトレプティコス』（哲学への勧奨）について　藤井義夫

○一橋論叢　第二十四巻第一号
国際通貨制度における金の問題
—ポンド切下およびドル切下をめぐり—　宮田喜代蔵
リカアドオの国際均衡論　小島清

○一橋論叢　第二十四卷第二号
損害防止條項、
特に Sue and Labour Clause
の史的考察　加藤由作
ヴォランタリイ・チェーンにおける基本問題　深見義一
○一橋論叢　第二十四卷第三号
有効需要の原理におけるケインズとマルクス　杉本栄一
経済学における経済政策
山中篤太郎
新厚生経済学の功罪　山田雄三
中世的国家形態の変遷
増田四郎
マキヤヴエリズムの問題
板垣与一
○一橋論叢　第二十四卷第四号
中世ドイツ国王選挙と多数決原理
町田実秀
I・M・C・Oへの路
—海洋自由論と世界経済—
大平善梧
○一橋論叢　第二十四卷第五号
社会経済史研究におけるマックス・ウエーバー　上原專祿
道徳の問題における超越的方法と経験的方法
太田可夫
技術と生産力　高島善哉
アリストテレスの「エウデモス倫理学」について　藤井義夫
エピクロスの復活　高橋安光
○史学雑誌　第五十九編第五号
「匈奴」の国家　護雅夫
○史学雑誌　第五十九編第六号
越後山間地帶における純粋封建制の構造　北島正元
サルルスティウス小論
吉村忠典
○史学雑誌　第五十九編第七号
日本中世禪林に於ける臨済・曹洞両宗の異同（上）
—「林下」の問題について—
玉村竹二
守屋美都雄
○史学雑誌　第五十九編第八号
古ゲルマン農政をめぐる諸問題
堀米庸三
日本中世禪林における臨済・曹洞両宗の異同（下）
—「林下」の問題について—
玉村竹二
○史学雑誌　第五十九編第九号
朱印船の貿易額について
岩生成一
宋代の郷村における小都市の発展（上）
—特に店・市・歩を中心として—
周藤吉之
○史学雑誌　第五十九編第十号
古墳より見たる古代史上の諸問題
齊藤忠
宋代の郷村における小都市の発展（下）
—特に店・市・歩を中心として—
周藤吉之

○史学雑誌　第五十九編第十一号
ジャクソニアン・デモクラシーと東部の労働者
—シュレジンガー・ジュニア学説批判—　三浦　進
秦漢両代における中国南境について　杉本直治郎
国造の姓と系譜　阿部武彦
○史林　第三十三巻第二号
中国上代は封建制か都市国家か　宮崎市定
シュメール人の家族に就いて　中原与茂九郎
上代地方豪族存在形態の一考察　横田健一
近畿の歴史的都市とその変貌　藤岡謙二郎
○史林　第三十三巻第三号
東亜に於ける銙帯金具とその文化的意義　樋口隆康
西アフリカに於ける二つの交易形態　岩田慶治
古墳時代における文化の伝播（上）　小林行雄
清代山東省の官制陸上交通路　河野通博
○史林　第三十三巻第四号
中世の世界図について　織田武雄
平安時代の農民—特に田堵・名主について　宮川満
シナ中世貴族政治の成立について　川勝義雄
古墳時代における文化の伝播（下）　小林行雄
○史林　第三十三巻第五号
殷代に於ける祖先の祭祀について　岡田芳三郎
中世におけるギリシア語とラテン語の問題　兼岩正夫
我が律令時代の里と郷について　曾我部静雄
○史林　第三十三巻第六号
北陸門徒の関東移民　五来重
ジョン・デイッキンソンのえらんだ道
—アメリカ独立革命における一穏健派について—　今津晃
ヨーロッパ村落の生態
—集落及び農地の社会的機能について—　水津一朗
宋代解州官営塩業の構造
—その支配と隷属—　池田誠
○人文研究　第一巻第七号
○人文研究　第一巻第八号
小説家バルザックの発展（一）　加藤美雄
○人文研究　第一巻第九号
ロマン・ロランのジャン・ジャック・ルソオ論　宮本正清
小説家バルザックの発展（二）　加藤美雄
○人文研究　第一巻第十号
十八世紀イギリス小説とイギリス市民社会　内多毅

○文　化　第二巻第二号
歴史主義と哲学　三宅剛一
アリストテレスの科学論　和泉良久
○文　化　第二巻第三号
レシングの宗教思想
―人類の教育について―　会津伸
マアロオ劇に於ける死と信仰
―中世との抗争―　松本文之亟
源氏物語に於ける宗教的内面化　小野村洋子
○文　化　第二巻第四号
本邦上古の海運　吉田良一
雑戸と品部　曾我部静雄
東北地方の彌生式文化　伊東信雄
三種の神器成立の一考案　平間喜栄
○大分大学経済論集　第一巻第二号
ヴキルブラントの世界聯邦論　梅田政勝
東亜に関する門戸開放政策の創始について　重光葵
○歴史評論　第四巻第八号
社会主義運動の黎明期　平野義太郎
福島事件覚え書　下山三郎
秩父事件　井上幸治
歴史学の方法についての感想　石母田正
縄文式文化　江坂輝彌
東予における慣行小作権の研究　山本重信
台湾民族解放運動史　向山寛夫
○歴史評論　第四巻第七号
日本に於ける英雄時代　藤間生大
英雄時代の文学　西郷信綱
歴史学の方法についての感想　石母田正
縄文式文化　江坂輝彌
漁村史研究の方法　服部一馬
被官は何故蔑視されるか　平沢清人
○国史学　第五十二号
上代東伊予の考古学的考察（上）　大場磐雄
紀伊国鞆淵庄における郷村制形成過程　小川信
日米通商條約の調印に関する一考察（下）　藤井貞文
鳥羽院の御素意
―院政史の一節として―　辻彦三郎
○国史学　第五十三号
中世に於ける東大寺八幡宮　村山修一
倭寇の変質と初期日鮮貿易　田中健夫
近世武家の家族動態　竹内利美
上代東伊予の考古学的考察（下）　大場磐雄
聖徳太子と神仙説話　林幹彌

石槨外から模造品の発掘例　清野謙次・豊崎卓

○人類学雑誌　第六十一巻第四号

多鈕細文鏡の一資料　梅原末治

石器時代貝塚中の細菌について（第二報）　小片保

明石西郊化石層に於ける骨の保存可能性　渡辺直経

先史時代骨類の化学的一考察　田辺義一

○史潮　第四三号

近世初期における鉱山の領有経営の形態及び鉱山聚落の構造　小葉田淳

法華八講の成立と公家社会—日本講集団発展史序—　櫻井徳太郎

隋朝末期の動乱における官僚群　小笠原正治

房戸口分田の穫稲数量について　宮城栄昌

綜合歴史記述の一形式—アレヴィの「十九世紀英国国民史」について—　穂積重行

○上代文化　第十九輯

遺跡のもつ地理性—先史地理の問題—　中川徳治

粘土槨考　佐野大和

山梨縣日下部中学校々庭聚落遺跡概報　小出義治・上野晴朗

○地学雑誌　五十九巻一・二号

シナントロープス発掘史　須田昭義

バタビヤ市の町名の構成について—附、ジヤワの地名の意義　別枝篤彦

東関東の台地に於ける農業土地利用の実態（一）　山口惠一郎

○沢陵史学　第三号

江戸時代に於ける庶民文芸発達とその時代性　鈴木崇夫

江戸時代に於ける商業の発展と商人の擡頭について　伊東秀吉

幕末開港條約締結の経緯に就いて　石井文夫

○芸林　第一巻第五号

段階と定型—封建制についての覚書—　高田保馬

浪速の儒者五井蘭洲—特にその徂来学批判について—　三木正太郎

敬語に表はれた上代文献の政治的性格（下）—大化改新の理念についての一考察—　青木紀元

○史学研究記念論叢

中世村落における農民と地侍　宮川満

鎌倉時代の国衙領　松岡久人

東国武士の西遷土着　河合正治

室町・戰国期の歴史思想　後藤陽一
近世初頭近江地方被地帳の研究　河井勇之助
白石晩年の学問　森原章
近世村落構造に関する一考察　石田寛
崑崙伝説の起源　御手洗勝
所謂「清談」について　井貫軍二
唐代に於ける仮子制について　矢野主税
宋代の義役　大崎富士夫
元朝秘史に現われた蒙古の社会集団の性格　田山茂
堂子祭祀考　上野実義
中国に於ける商工ギルドの素描　今堀誠二
中国に於ける所謂典礼問題の解決について　伊東隆夫
Symposionについて　高山一十
メロヴィンガー朝下における寺領庄園の発達　舟越康寿
封建制成立に関するドブシュの見解について　竹内正三
マキアヴェリにおける人間・歴史・政治について　吉武夏男
追憶の騎士　三木英利
モムゼンのボエニ戰爭史論について　千代田謙
歴史主義と唯物史観　明石総一

○史学研究　第四集
希臘における社会史の系譜　高山一十
同族意識の成形　内海巌
六国史の史学思想　友田吉之助
資本制生産完成期の英国農村社会　新井嘉之作

○人文研究　第一巻第十一号
○一橋論叢　第二十五巻第一号
○考古学雜誌　第三十六巻第四号
古代のモンゴリア　バアディム・エリセエフ
モヨロ貝塚人の埋葬に就て　児玉作左衞門
モヨロ貝塚出土の骨角器雜考　大場利夫
下北半島新石器文化の編年的研究　中島全二
青森縣下北郡東通村尻屋物見台遺跡の調査報告　江坂輝彌
八ッ缶西山麓与助尾根先史聚落の形成について　宮坂英弐

○資源科学研究所彙報　第十七—十八号

九州史學會本年度委員

顧問　長寿吉
長沼賢海
重松俊章
竹内理三

委員長　常任委員　鈴木俊
副委員長　同　小林栄三郎
同　日野開三郎
集会幹事　同　檜垣元吉
同　同　江島寿雄
同　同　服部哲郎
同　委員　渡辺正気
同　松垣裕
同　船木勝馬
同　森祐三
同　宮野啓二
同　山下孝二
編輯幹事　常任委員　森克己
同　同　西尾陽太郎
同　同　今来陸郎
同　同　三上正利

書記　同　三木俊秋
同　平島貴義
同　鈴木鋭彦
同　菊池英夫
同　奈賀博史
同　杉谷昭
牧久